

令和五年度 作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部

学位記授与式 式 辞

今日のおよき日に、卒業生・修了生の皆さんが、学位記を手
にされ、本学から新たな世界に巣立っていかれることに対し、
本学教職員と在校生を代表して心からお祝い申し上げます。
栃木県知事 福田富一様をはじめご来賓各位には、ご多忙の
中を本学の学位記授与式にご臨席を賜り、心からお礼申し上
げます。

現在は、すでにウィズコロナの時期に入り、以前のような
不安な環境もある程度なくなってきましたが、思い返せば、
多くの皆さんが入学された四年前、あるいは二年前は、まさ
にコロナ禍の影響を受けていた時期だったと思います。キャ
ンパス内での安全対策を徹底しながら、学修面では対面授業
に代わるオンライン授業 あるいは両方を取り入れたハイブ
リット方式による授業、課外活動では練習の制限や大会の中
止・延期、その他行事や実習の面でもさまざまな工夫の中で
限定的な実施となりました。そうした中で、みなさんは、さ

さまざまな困難を乗り越え、各自目標に向かって努力され、今日の晴れの日を迎えられたことに対して、敬意を表したいと思います。

さて、ご承知のように、今年一月一日に能登半島地震が発生しました。すでに約二か月半が経過しようとしていますが、完全な復興までには、依然時間がかかることと思います。被災されたみなさまの安全の確保、そして被災地域の一日も早い復旧を心より願っているところです。被災された人たちにとっては、それまでの普段の日常生活が一気に奪われました。私は、今回のこの震災で、二つのことを改めて考えました。このことを通して、皆さんへの私からのメッセージしたいと思います。

第一は、普段の何気ない日常生活の大切さとその意義です。これに関して、数か月前に「パーフェクトデイズ」という映画を見たことを思い出しました。ご覧になった方もいるかと思いますが、監督はドイツ人ですが、東京渋谷の公衆トイレの清掃員をしている役所広司が演じる平山という主人公の何気ないルーティーンな生活を繰り返し描かれる作品です。

一見単純なストーリーに見えますが、それが単なる繰り返しではなく、彼にとっては、人との出会いや自然とのふれあいなど、「いつもすべてが新しい」ものとして描かれています。みなさんも、今後社会に出られて、忙しい日々を送られるかもしれません。そうした中でも、日頃あたり前に思われているルーティンな生活の大切さと、その日、その日に起こる何か新しいものをできるだけ感じながら生活していつてくください。

第二は、日本人の素晴らしさとながりの大切さです。三年前の東日本大震災のときもそうでしたが、今回も、支援物資を配られる際、人々は整然と並び受け取っている光景をテレビなどでしばしば見ることがあります。また、被災されているにもかかわらず、感謝の心を忘れずにいる人たちの言動に、ある意味日本人の最も大切なものを垣間見たように思えます。さらに、以前被災した地域の人々がいち早くそのお礼、お返しをしようと支援している人たちにも感動しました。ただ一方では、残念ながら、留守宅に侵入し、ものを奪う心ない人たちがいることも事実です。そうした人たちを、私は

「透明人間」と呼んでいます。倫理やモラルの問題で、「透明人間」を事例に人間の自律について考えることがあります。他者から見えなければ、ある意味、人間は弱いものですから悪事を考えます。もし、皆さんが「透明人間になったとしたら、どのような行為を考えるでしょうか。」おそらく必ずしも良いことばかりを考えるということではないかと想像します。その人間の弱さを律するのは、「良心」や「強い意志」を挙げる人がいるかもしれませんが、別な観点から、他者との関係性ではないかと私は考えます。人間として、他者とのつながりを意識すれば、例外はあるでしょうが、一般的には悪事は行わないはずで。

こうした他者とのつながりを大切に、自己を律しながら他者のために何かを行おうとする日本人としての利他的精神の価値を、ぜひみなさんにも心にとどめて生きていってほしいと考えています。

さて、みなさんは、本学の建学の精神である「作新民」、教育理念としての「自学・自習」「自主・自律」の下で学んできました。「作新民」とは、刻々と変化する時代の中で、自主的・

自律的に生きていく人間の育成を意味します。

これからの時代、世界的に起きている戦争、大震災、気候変動による自然災害、コロナをはじめとする感染症、あるいは生成AIの技術の革新など、これまで想定していないような問題や課題が発生してくることが予想されます。みなさんは、ぜひ改めてこの「作新民」の建学の精神のもと、この「答えのない時代」に対応する能力を持ち、常に初心を忘れず自分の夢に向かって進み、学びつづけていって下さい。

最後になりますが、卒業生・修了生の皆さんが、諸先輩に続いて、今後さまざまな分野で活躍されることを祈念し、私の式辞といたします。

令和六年三月十七日

作新学院大学・作新学院大学女子短期大学部

学長 渡邊 弘